

高御座の考証と復原

平城宮跡発掘調査部では、平城宮第1次大極殿1/10復原模型内に設置する高御座の1/10復原模型を製作した(口絵参照)。古代の高御座の構造意匠に関する資料はほとんどないので、復原設計にあたっては、現存高御座を基本資料とせざるをえない。現存高御座にもとづきながら、文献史料によって復原できる点をあきらかにし、後世の意匠を反映する点については、できる限り奈良時代初頭に近いものに修正するという方針で設計を進めた。

文献史料からみた高御座 高御座は、治承元年(1177)の平安宮大極殿焼失以降、規模を縮小して紫宸殿・太政官庁に設置されるようになった。そのため、文献の調査対象はそれ以前のものに限定した。史料は『内裏式』『内裏儀式』『儀式』『延喜式』『文安御即位調度図』および裏松固禪『大内裏図考証』、平胤禄『高御座勘物』所引の院政期古記録などを利用した。

院政期古記録にみえる高御座は、壇が上・中・下の3段あり、その上に柱を8本立てて帳をめぐらし、八角形の蓋をのせている。蓋には鳳凰、鏡など多くの装飾品がつく。壇の名称は、下壇が「壇」、中壇が「(御帳)土居」、上壇が狭義の「高御座」である。御帳土居とは帳台の柱が立つ土台、狭義の高御座は天皇が座る壇のことであろう。

表1 装飾品の復原

		史 料		デザイン	
		寸法、文様	員 数	参 考	備 考
蓋	鳳 凰	大1.7尺小1尺	大1 小8	百済陵山里寺出土 金銅大香炉	
	鏡	大1尺小4寸	大1 小24(各面3)	正倉院 日光型	大鏡は光芒なし
	玉 幡		8(各隅木下)	形態は法隆寺献納 宝物広東綾幡ほか	金具は正倉院雑 貫などを参照
	玉帽額	1 尺	16(各面2枚)	法隆寺金堂天蓋の 木製垂飾り	
	障 子	表：韓紅花綾 裏：白綾	12	法隆寺献納宝物蜀 江錦帯および	正背面を除き各 面2枚 半部式
	帳	表：浅紫綾 裏：緋綾	2	正倉院 双鳥連珠文赤綾	正背面
下壇	敷 物	赤地唐錦		法隆寺献納宝物蜀 江錦帯および	
中壇	敷 物	青地唐錦		中国新疆トルファ ンシヤスタナ	
上壇	敷 物	青地唐錦		211号蔵出土の連 珠団花文綾	
	椅 子			正倉院 赤漆欄木胡床	
木階	敷 物	縹緋		正倉院 紺地目文縹緋綾	

高御座の研究史をふりかえると、これは常設のものか、臨時のものか、また、唯一のものか、複数存在するものかという議論がある。『延喜式』などをみると、最下壇の「壇」のみは複数常設であっても、狭義の高御座本体は唯一であり、中壇の土居桁と柱、装飾品などとともに、通常は内蔵寮に収納され、儀式に先立って臨時に敷設される建前であったことがわかる。但し、『日本紀略』昌泰2年(899)5月22日条には「未時、飄風吹。傾大極殿高御座於異方。」とあるので、9世紀末の実態としては、柱や蓋などは撤収されず、常置されていたものと思われる。

現存高御座との比較 まず、現存高御座について記そう。現存高御座は明治42年(1909)の「登極令附式」にもとづき、大正天皇の即位に際して新調されたものである。高御座は3つの壇、すなわち長方形下壇(正面6.06m×側面5.45m、長八角形中壇(対辺距離正面5.55m×側面3.90m)、長八角形上壇(同4.95m×3.30m)からなる。下壇には赤地、中・上壇には青地の敷物を敷き、上壇には畳、椅子を重ねる。下壇から壇下にかけて背面に5級の本階をつけるが、両側面3級の本階は平成度即位儀の後に撤去した。また、下壇と木階には高欄をめぐらす。柱は円柱で上壇に8本立ち、柱上には長八角形方形造の蓋をのせる。各隅木鼻には蕨手をつけ、その上に鳳凰をおき、蕨手下には幡を下げる。蓋の頂上には方形露盤をのせ、その上に蕨手上のものより一まわり大きな鳳凰をおく。軒先各辺には鏡と唐草の装飾を交互に配す。柱間は開放で、各間に引き分けの帷をかけ、内法長押下には帽額を下げる。

次に古代の高御座と比較してみよう。各部の復原設計については後述し、3つの主要な相違点を述べる。

- ①高御座の壇と柱の立つ位置：現存のものは柱が上壇に立つ。前述のように、古代のものは中壇の御帳土居の上に柱が立っていたとみるべきである。
- ②平面形：前述のように現存高御座は蓋が長八角形である。これに合わせて、軒先各辺に配された鏡の数も正背面が各5枚と多く、他の6面が各3枚と少ない(鏡の数は院政期古記録も同じ)。しかし、『延喜式』では各面3枚ずつとなっており、蓋および上・中壇の平面形は正八角形であった可能性が高い。
- ③帳の数：現存高御座は8枚で各面につけ、柱間の中央で左右に引き分ける(この点は院政期も同じ)。しかし、

『延喜式』では「障子十二枚、帳二条」とあり、障子は正背面以外の柱間6面に各2枚ずつ納められていたと推定される。帳2条は、それぞれ八角形を半周する形で障子と重ねてかけめぐらし、正背面で左右に引き分ける可能性と、正背面各1枚として巻き上げる可能性が考えられる。前者は障子と帳との関係に問題が残り、後者の場合、儀式の際の女官2人による帳の開閉法が問題となる。今回の模型製作においては後者を採用した。

躯体の復原 不明部分が多いが、以上の考察をふまえて、現存高御座や古代の建造物等を参考に設計した。平面規模は、院政期には畳一丈四方が上壇に納まるとされており、上壇を対辺距離15尺の正八角形とした。一方、中・下壇は『大内裏図考証』に記された寸法を参考に、中壇を対辺距離18尺の正八角形、下壇を一边24尺の正方形とした。下壇には高欄を付け、下壇および高欄の形式は大極殿模型になった。また、昇高欄は平等院鳳凰堂仏壇を参考にした。木階は現存高御座にならい、背面を5級、両側面を3級とした。柱は中壇に立て、古代の八角円堂にならい八角柱とした。柱間装置は前述のように正背面に帷、他6面には障子を2枚ずつ入れ、障子2枚は半蒔型とする。高さについては文献史料にも記載がなく、3つの壇いずれも現存高御座の寸法をほぼそのまま採用した。また、下壇上端より蓋の頂上（露盤の下）までの高さは、現存高御座正面のプロポーションに合わせて17.4尺とした。

蓋の意匠も不明だが、史料に玉幡が帽額から1尺とあり、軒の出を1尺とした。蓋の曲線は正倉院六角厨子残欠のものを採用した。蕨手は東大寺八角燈籠、露盤以上は法隆寺夢殿と東大寺八角燈籠の意匠を参照し、最上部に平城京出土の擬宝珠をおいた。下壇側面の格狭間の形状は、正倉院赤漆文櫨木厨子の台脚を参照した。なお、単位尺は大極殿模型にならい、1尺=29.54cmとした。

装飾品の復原 数量、大きさは文献史料に沿い、デザインについては、正倉院宝物、法隆寺献納宝物などを参考に設計した(表1)。このうち、玉幡は法隆寺献納宝物広東綾幡等の形態を玉で作製することとし、玉の連ね方は阿武山古墳玉枕復原模型になった。敷物は各壇同デザインとし、帷と障子も同デザインとした。飾金物のデザインは法隆寺金銅小幡の偏向唐草、奈良時代初期の軒平瓦文様などを参考に設計した。調度品は、畳を用いず、

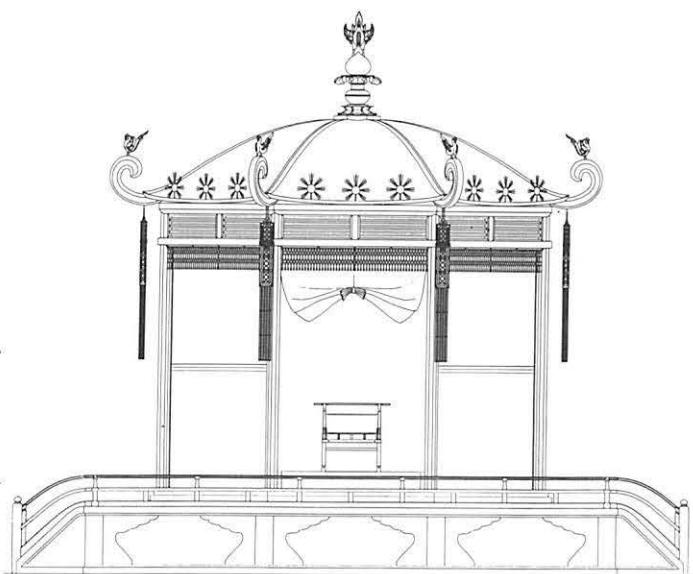


図1 高御座復原平面図 1:100

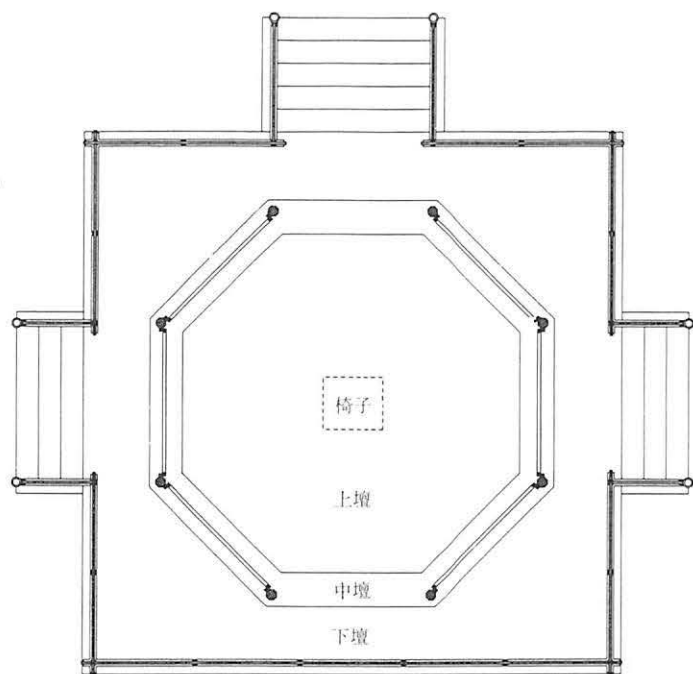


図2 高御座復原平面図 1:100

椅子式にするという方針から、椅子を製作した。

まとめ 文献上の検討から、高御座は常設で複数存在するのか、唯一にして臨時に設置するのかという研究史上の議論に対し、後者の可能性が高いとの見通しを得た。また、柱のたつ位置や平面形等に現存高御座とは異なる点をみだし、復原模型の設計に反映させることができた。模型の細部意匠については、資料的制限もあり、思いきって決定せざるをえなかった面も少なくない。諸点について、各方面からのご批判をいただければ幸いである。

(古尾谷知浩・箱崎和久／平城宮跡発掘調査部)